

実行の人・河口慧海

宮田 恵美



堺の皆さん、よくおいでくださいました。

私は、旧姓を河口と申しまして、河口慧海かわくちえかいの弟である半瑞はんずいという者の娘です。

伯父の慧海と私たち一家は、ずっと一緒に暮らしておりました。

そこで今日は、私の知っている限りの河口慧海についてお話をさせていただきます。と申しております。と申しましても、私は仏教については、何も存じません。毎週、日曜日に講義を聞きにおいでになる方々に、お茶をお出しただけですから。ただ、慧海がどういう人間で、どんな考え方で生涯を過ごしていたのが、少しでもお伝え

できれば、ありがたいと思っております。

河口慧海とは、こんな人です

河口慧海は、慶応二年（一八六六年）、堺市の北旅籠町に生まれました。桶・樽製造が仕事だった父親の「職人に学問なんかいらぬ」という考え方で、なかなか勉強をさせてもらえませんでした。それでも、本人は学問が大好きで一四歳で夜学に行き、数学、漢学はもとより孟子、論語から、後には英語をはじめパーリー語からチベット語まで、自分で先生について一生懸命に学びました。

その河口慧海の一生を決めたのは、一五歳の時に出会った『釈迦一代記』という一冊の本だったでしょうか。お釈迦さまの大慈悲心に感動して、一五歳から二五歳までの一〇年間、禁食肉・禁酒・淫の三つを守りました。お酒は好きでしたし、堺の海近くに住んで、海の幸にも恵まれていたので、とても辛かったと、後に述懐しています。



河口慧海生家跡碑
(北旅籠町西)

一〇年たった時に一度それを止めましたけれども、ほどなくまたはじめて、二七歳からは午前中だけで午後は何にも食べないという非時食戒ひじまかも共にはじめ、これからは八〇歳で亡くなるまでずっと続けました。晩年、「とうとう、ゆで卵の一つも食べずに、死んでいくんだなあ」としみじみと、つぶやいていました。

しかし、これで大変だったのは、慧海の弟の半瑞とその妻よね、つまり私の父母でした。何しろ、一切の生ぐさものは食べないし、だしも昆布と椎茸だけ。一日に二食で、一二時をちょっとでも過ぎたら、もう食べないのですから、私の母が、何とか一二時前に食事が終わるようにと、毎日大変でした。

そのかわり、午後からは何も口にしませんでしたから、夕食は、私たち家族だけで肉も魚もいただきました。それでも



講演風景（リーガロイヤルホテル堺）